

雨の日は、毛皮が濡れてうっとおしいが、だんだん暑くなってきたこの時期になると、晴天は、また別の辛さがあった。

生まれて初めての暑い季節である。

黒くて長い毛皮には、この暑さは厳しかった。

殊に、陽のあたる日中は、どうしたらよいのか分からないくらい暑く、息苦しい。

その日は、強い陽射しを避けて、煉瓦造りの建物の陰に入って体を休めた。空腹はいつものことだった。

蒸し暑い日だった。

湿気を含んだ風が厚ぼったい雲を少しずつ集め始めていた。

濃い灰色の雲の縁は金色に輝き、その雲の合間から時折、太陽がぎらぎらと差し込む。

はるか遠くで乾いたような遠雷が響いた。

とその時、鐘の音が響いた。

間もなく、建物の中央にある石でできたアーチから、人々がぞろぞろ出てきた。石のアーチの一番上には、やはり石でできた葡萄の房が彫られている。そこは葡萄酒醸造所の瓶詰工場で、昼休みの鐘が鳴ったのだった。

工場の広い前庭にある大きなアカシアが木陰をつくり、人々は、それぞれに心地よさそうな場所を見つけて昼食や、休み時間を楽しんでいる。やがて、石段に腰掛けて昼食を摂っていた一人の青年が、煉瓦塀に寄り掛かるようにして座り込んでいる黒い犬を見つけた。

若犬は、いつの頃からか、まっすぐに正座することをしなくなり、い

つでもぐったり横坐りをするようになっていた。

「お、見慣れない犬が来てる……」

青年は、持っていた自分の昼食から小さな肉の一切れを取り出し、犬に投げ与えた。

「わあ、何か投げてきた……」

若犬は、自分に向けてモノが飛んできたのに驚いて、あわてて体を起こし、その場を離れた。

「あ……慣れてないな……」

しかし、その青年にさほど危険な気配は感じられなかったので、そう遠くへは行かず、少し離れた月桂樹の木陰に入って様子を窺った。

「おいしい、クロいの……おいで……」

青年は、根気よく呼びかけながら、もう一度、持っていた自分の弁当の中から一切れの肉片を犬に投げてやった。

その時、敷地のかなり離れた処で、先刻からこちらを牽制するようの様子を見ていた別の犬たちの中から、一匹のまだ若くて痩せた雌犬がすごい勢いで走り寄ったかと思うと、あっという間に青年の投げた肉をくわえて食べてしまった。

「あれ？ あの仔食べた……」

若犬は、呆気にとられてその様子を眺めた。

そして再び木陰を移動した。

「うわっ！ チビだめだよ。これは新しい仔にやったんだから……。ほらあ、お前が食うから行っちゃったよ……」

青年は呆れて、毛足の長い臆病そうな黒い犬を眺めながら、もう一方

の餌を横取りした犬に話しかけた。

「今のごはんだったんだ……。あのひと、ごはんを投げてきたのか
……」

若犬はこれまで誰かが投げてよこしたものを拾って食べたことがなかった。エサを投げて貰う習慣がなかったのだ。

ごちそうを食べ終えた赤茶色の雌犬は、その青年に馴れているのか親しそうに尻尾を振りながら、次のエサが投げられてくるのを待っている。昼休みの庭で、この葡萄酒工場で働く青年は、二匹の犬たちを見比べながら、口笛を吹いて図体の大きい新入りの野良犬に声をかけた。

「おい、クロいの……こつちおいで……ほら、ごはんだよ。……あ、チいビ、お前はいいの、もう食ったろ……」

若犬は、木陰から動こうとはしない。

例の雌犬も相変わらず尻尾を振りながら、次のエサを期待してその場を動かない。

時々こちらの黒い犬の方を見やりながら、元気よく尻尾を立て、姿勢を正して彼の前に陣取っている。

やがて、辺りをきよろきよろした赤茶色の犬は、ぴよんと勢いよく飛び跳ねて向きを変えると、黒い若犬のところに弾むようにやってきた。

そして、少し体をくねらせながら、なつっこい眼をして若犬に話しかけてきた。

「おじちゃあん……」

鼻の先が薄赤くて、体全体が赤茶色の短毛のこの犬は、子犬から成犬にさしかかり、年の頃は自分と同じくらいかもう少し年下だろうか。

このなつこさ、というか馴れ馴れしさは生まれながらの野良犬ではなく、自分同様、最近うちやられた犬のようだった。

「ねえねえ、おじちゃん……おじちゃん、此処んちの仔お？……」
つい先日まで、ムク犬のゴンから『小僧』呼ばわりされていた若犬は、
突然今度は『おじちゃん』になってしまった。

若犬は慥然とした。

「ち、違うよ」

「へえ、ちがうの？ ……ふうーん……じゃあさ、どっから来たの？
おじちゃん、どっから来たのお？」

その赤茶色の犬は、天真爛漫で全く悪気というものがなく、目を輝か
せて細い体はずませながら話しかけてくる。

「ねえ、おじちゃんてば……」

「お、おじちゃん、て呼ぶな……」

ゴンが言っていたと同じ言葉を、今度は自分が言うことなろうとは思
ってもみなかった。

つづく